

第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

行って帰り。

大阪府
大阪教育大学附属池田中学校
2年 吉和 美優

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

行つて帰り。

大阪教育大学附属池田中学校 二年

吉和 美優

「行つて帰り。」

この言葉を聞くと、私はひいおばあちゃんのことを思い出す。しかし、彼女はもうこの世にはいない。私が五歳の時、紅葉が真っ赤に染まり、少し肌寒くなる季節に帰らぬ人となつてしまった。その肌寒さは太陽のように暖かかった彼女がいなくなつてしまったことを告げているようだった。

広島と大阪。住んでいた場所が離れていたため、一年にたったの数回しか会えなかったが、私は彼女のことが大好きだった。ある日、遊びに行くと、こちらまで笑顔になれる優しい笑顔でいつものように

「よう来たねえ。疲れたじゃろ。ゆっくりしんさい。」

と言い、出迎えてくれた。そして、お皿山盛りの料理が待つリビングに通される。私達家族は、瀬戸内海の新鮮な魚、ちらし寿司、トンカツなど豪華な夕食を口いっぱい頬張りながら広島カープの話でひいおばあちゃんと盛り上がるのが定番となっていた。彼女は大のカープファンだったのだ。ああ、そろそろお腹がはちきれそうだ……。そう思っていた時に、

「みゆちゃん、おかわりは？」

そう微笑まれた。しかし、もう限界だった私は、パンパンになったお腹をさすりながら、

「もうお腹いっぱい。ごめんね。」

そう答えるしかできなかった。実際に食べきれないくらいの量の料理を私達のためにふるまってくれた彼女は本当に自分よりも他人のことを一番に考えているのだ、と幼いながらも感じて、こんな人に自分もなりたいたいと思ったのを強く覚えていた。そして、楽しい時間はあつという間に過ぎてしまい、別れの時がやってきた。もつと広島にいたい。そんな名残惜しい気持ちを引きずりながらも、大阪へ帰るため車に乗り込んだ。その時だった。ひいおばあちゃんが走つて家から出てきた。何かあつたのだろうか……。そう思つて心配していたら私の手を握つて涙目になりながら、

「行つて帰り。」

と願い事をするように言つてくれた。その手は、柔らかくて暖かくてまるで彼女自身のように感じた。思わず、私も涙目になつてしまい、

「うん、ありがと。ばあちゃんまた来るね。」

と消え入りそうな声で言うのが精一杯だった。その後も車の窓を全開にして手を振っていると、いつまでも手を振り続けてくれた。この日が、生きているひいおばあちゃんを見た最後の日だった。

それから数年後のこと。「行つて帰り。」という言葉が再び懐かしく聞くことになった。それはNHKの連続テレビ小説「マッサン」だった。イギリス出身のヒロインが、夫であるマッサンに何度も「行つて帰り。」と声をかけていた。この言葉は広島弁で、「無事に行つて帰つてきてください。」という強い意味が含まれているそうだ。

「行つて帰り。」の正しい意味を知った今では、ひいおばあちゃんの優しい気持ちに更に強く伝わってくる。そして、この言葉は伝える相手のことを心の底から想っていないと口に出

せないと思う。「行って帰り。」そう言えるような人間になってこのすばらしい日本語を使ってみたい。